

<前回>理新論と千年王国論**(1) 啓蒙的近代とその意義**

5. 近代とは：社会システム変動が現実性全般に及ぶプロセス
キリスト教の普遍性あるいは合理性に対する根本的な問題提起
社会統合の原理がキリスト教から次第に分離し、キリスト教の地位が相対的に低下する。キリスト教会→国民国家、神学→哲学→科学
6. カント「啓蒙とは何か」(『啓蒙とは何か』岩波文庫)
7. 啓蒙主義とは？ (シャンタル・ムフ『政治的なるものの再興』千葉眞他訳、日本経済評論社)
 - ・「啓蒙の抽象的普遍主義、社会的全体性に関する本質主義的構想、単一の主体の神話」「啓蒙の認識論的視座」「自己の基礎づけにかかわる啓蒙のプロジェクト」
 - ・「万人の平等と自由とを成就していった近代の政治的プロジェクト」

Alister McGrath, *The Open Secret. A New Vision for Natural Theology*, Blackwell, 2008.

7. A Dead End? Enlightenment Approaches to Natural Theology. pp.140-170.

↓

理神論

(2) 理神論＝啓蒙主義的宗教論 (17～18世紀、イギリスからフランス・ドイツへ)

国家や教派を越えた決定的な影響力

9. エドワード・ハーバード、ジョン・ロック、ジョン・トーランド、カント
10. 理神論、キリスト教の合理化の試み → キリスト教の解体・宗教批判から無神論へ。
11. 宗教本質論として：信仰とは、信仰命題を真理として受け入れること。知的営み。
ハーバード『真理について』(1624)：理性宗教(自然に備わった生得的なもの)
最も本質的な最高存在が存在する、最高存在への崇拜、敬虔な崇拜は美徳である、罪は悔い改めによって贖わなければならない、来世(因果応報的)の存在
13. F.L.Cross and E.A.Livingstone(eds.), *The Oxford Dictionary of the Christian Church*. Third Edition, Oxford University Press, 1997.

(3) 教養市民層の宗教

14. 啓蒙的近代の宗教状況。
ヒュームの自然宗教(人間の自然本性に基づく合理的宗教)論の描く世界
クレアンテス：理神論者、フィロ：懐疑論者、デメア：有神論者
15. 啓蒙主義の多様性：イギリス、フランス、ドイツ。→比較思想研究
16. 近代ドイツにおける宗教の分化：世俗化の一つの形
ルター派／カトリック
教養市民の宗教／農民の世界／都市労働者の世界
17. 「教養市民とは、十八世紀末ないし十九世紀はじめ以降のドイツで「教養」の理念を核として輪郭をととのえていった一つの身分を指し、具体的には、ギムナジウムと大学で新人文主義的教育を受けた、ごく少数のエリート層を意味する。」(野田、21)
イギリスのメソヂストとドイツの敬虔主義の違い。

↓

社会の安定化のために教会的宗教にも価値を見出しているが、自らの宗教性は、教養化し個人化してゆく(フランス啓蒙との相違)。

(4) 17世紀イギリスと千年王国論

18. 合理性の時代と終末論
19. 時代の共通精神としての終末論
 - ・ヨハネ黙示録解釈(近代聖書学の発端)
 - ・千年王国論、アンチキリスト
 - ・第五王国派の武装蜂起
 - ・霊的千年王国論

6. 近代聖書学と歴史的精神

(1) 近代と歴史的精神

1. 自然主義と歴史主義

近代的知の二つの動向（因果律の二つのタイプ）

作用連関と意味連関の組み合わせの諸パターン。

→ 自然科学／精神科学、説明／理解

2. 「近代」と人間的現実の歴史化

現実は無常不変ではなく、変化する。人間の諸活動の集積、所産。

↓

近代歴史学、歴史的視点

「近代化」の存在論的性格は《歴史化》と呼ばれるものであり、近代世界を貫いた社会変動は、メッサニーが言う「自然」からの「自由」という性格をもっていることに、われわれは注目せねばならない。つまりそれは「自然」から「自由」へという変化、「自由」の介入によって「自然」が「歴史」化する過程でもある。」（大木、上、47）

「四つの相における近代化」「①工業化、②都市化、③民主化、④情報化」（55-60）、「真理から情報へ、これは、真理の歴史化と言ってよい。真理は無常ではない。」（58）

「近代化の深層構造」「①非魔術化・合理化」「②自由化としての近代化」（60-63）、「コスモス」から「歴史」へという《歴史化》が、われわれの歴史神学の座となる。」（62）

3. プロセスとしての自然（外となる自然と自然本性）＝自然史

「自然史の観念は直接的には自然という言葉の十八世紀的用法から起こった」、「種々の事物——物質界、有機体的生命、理念、制度といった——の「自然史」を明らかにすること、これが十八世紀後半、西ヨーロッパのきわめて多くの哲学者たちの目標であった。」（ニスベット、194）。

「この方法の固有なものは、当面の研究に関する「世論や制度の起源を、いわゆる人間的自然の原理や社会の環境から導き出すことである。なかでもとりわけ重要なのは、人間の歴史の自然的行程、つまり人間がこれまでたどってきて、この先も「偶然」や「干渉」が定められた進路……から逸脱させないかぎり、たどっていくはずの行程を明らかにする、叙述の構成である。」（210-211）

「十八世紀における進歩の理念や自然史の理論から、十九世紀における社会進化論の諸相に至るまでの距離は、ごくわずかである。二つの世紀にみられる「進歩」、「発展」、「進展」、「自然史」といった言葉は、ほとんど相互に交換することができた。」（214）

ルソー『人間不平等起源論』（1755）、アダム・スミス『諸国民の富』（1776）、ヒューム『宗教の自然史』（1757）

cf. 18世紀：博物学・自然誌

分類と系統

4. 「歴史主義」の多義性あるいは混乱

歴史主義という用語は、様々な視点から様々な意味を賦与させて使用されている。特に、ポパーとのほかの論者との相違。

「歴史主義」「その悪しき側面から完全に引き離され、人間とその文化や諸価値に関するあらゆるわれわれの思惟の根本的歴史化という意味において理解されねばならない」、「しかし、この歴史主義に対して、自然主義が同様に原理的かつ包括的な仕方に対立している」（トレルチ、諸問題・上、158）、「自然主義は、あらゆる質的なことや直接的経験を度外視する法則化の連関として、またそのようなものとして現実総体を包括する連関として理解されなければならない」、「自然主義と歴史主義とは、近代世界の二つの巨大な科学的創造であり、この意味においてそれらは、古代にも中世にも知られていないものであった」（159）、「近代的思惟一般が持っている二つの本質的動機」（164）。

5. 存在レベルにおける歴史・歴史化（存在論的概念）

・人間存在の歴史性

- ・聖書的な歴史的思惟（聖書の宗教が歴史的思惟であるという意味）
聖書的人格主義とギリシヤ的存在論、動的歴史的と静的形而上学的、といった対比。
- ・近代化が歴史化であるという意味での歴史

↓

歴史・歴史化とはどのレベルにおけるいかなる現象・事態を意味しているのか。

6. 知・人間的現実の地平としての歴史

倫理的なあるいは宗教的な価値・理想は、歴史的な形成物(歴史的な原因と結果の連鎖の中にあり、その意味はこの連鎖という全体の中で規定される)である。

cf. 自然法

↓

価値や理想の妥当性はそれが形成生成してきた歴史的連鎖(文脈)の範囲内に限定される。この限界を超えた普遍化は不可能あるいは間違っている。といった認識あるいは感覚。

相対性の意識＝歴史相対主義→ニヒリズム

「この時代の激動は、倫理学の崩壊をももたらした」(大木、1)、「相対主義の克服とは、相対主義が文化ニヒリズムへと転落する道とは逆の方向を模索することであり、崩落に身を委ねるのではなく上昇の意志をもつことである」、「今日の知的課題は、倫理学の建設である」、「相対的状况を十分知りながら、なお倫理学が倫理学として必然的に求めるべき普遍的な当為を探究する一つの企てがなされる。」(2)

「自然主義は無制限に、あらゆる生活のものずごい自然主義化と荒涼化へと導き、歴史主義はあの相対主義的懐疑に導く」、「歴史的なものの認識可能性と意味とに対する相対主義的な価値的懐疑であり疑惑である」、「これら悪い副次的な意味」、「歴史的素材を使いこなす文化総合へと向かう勇気をふるい起こす歴史哲学を求めている。」(トレルチ、165)

7. 争点：ニヒリズムそして倫理学

決疑論か状況倫理か

8. H・R・ニーバー『啓示の意味』

9. 抽象的な普遍主義・客観主義ではなく、具体性から出発し普遍性を展望する相互主観主義。→ 経験の共有可能性と翻訳可能性を前提にして、他者との合意形成に努力する開かれた知性。批判的实在論。

(2) 近代聖書学とその諸前提

1. 知・人間的現実の地平としての歴史(歴史化)→歴史主義・歴史的思惟

倫理的なあるいは宗教的な価値・理想は、歴史的な形成物(歴史的な原因と結果の連鎖の中にあり、その意味はこの連鎖という全体の中で規定される)である。

2. 近代的知・歴史主義に基づいたキリスト教思想(研究)＝近代聖書学の成立

近代世界(近代的な日常性)へのキリスト教の適応という歴史的動向において。

・18世紀「新しい解釈学をめぐる対決」(シュトゥールマッハー)

「正統主義はただ、十八世紀における対決を決定的な仕方規定した、啓蒙された合理主義あるいはピエティズムという二つの運動と結び付けている所でのみの、生き延びることができた」(180)、「対決の結果は、聖書の歴史的・批判的研究をもはや長いこと回避せず、遂行して、まさにそのことによって聖書の道を指し示す声を、新たに確かなものにするということに対して備えることである。この結果に啓蒙主義とピエティズムは等しく与った。プロテスタントが自分の土台の力を信頼して、この対決を回避しなかったことは、全体としてプロテスタントが誇ってよいことである。」(181)

先駆者：ルターとカルヴァンという出発点、フラーキウス、ソツィニ派、グロティウス
トゥレティニ(1671-1737)、ヴェトシュタイン(1693-1754)、ゼムラー(1725-1791)
ベンゲル(1687-1752)

「十八世紀の新しい解釈学をめぐる論は、革新論の事実上の優勢と、革新論者と敬虔派と

が共に肯定し実践した聖書の歴史的・批判的考察でもって閉じられる」(206)、「純粹に学問的なテキスト解釈が、いかに教会に役立つもし、害を与えもするかは、テルトゥリアヌス以来すでに明白である。」(207)

・19世紀「シュライアマハーの解釈学」「調停」

・シュトラウス(1808-1974)『イエスの生涯』(1835/36)

「イエスに関する聖書の伝承にあてはめた神話概念」は「無意識に作られる伝説という形で形成されたものと定義している」(219)

・バウル(1792-1860)とテュービンゲン学派

「シュトラウスにおいてすべての人にとって明白な仕方では始まる、批判的な歴史観とキリスト論的な教義との食い違いを、バウルはその研究によって解釈学的にも実際的にも克服した。正にこのことによって彼は後世に対して、歴史的・批判的神学はどうあるべきか、またいかに作業をする必要があるかということに対して、一つの尺度を打ち立てた。」(224)

「釈義が歴史的・批判的神学と理解されることを欲する限り、今日バウルとシュライエルマッハーより後退することはできないし、また許されもしない。」(224)

3. 近代歴史学の成立→近代的知の基礎学としての歴史学

言語学、法学、哲学、神学、地質学、生物学など

・「十八世紀のいずれかの時点で、ドイツの大学、とりわけゲッティンゲン大学において、今までの単なる考証学から新しい科学的な方向、つまり、証拠となる史料の批判的検討と、出来事の成行を物語風に再構成することとを結合させるような方向に向かつての歴史学科の移行が始まった。この移行は、体系的でアカデミックな専門的研究としての歴史学の登場と密接にからみ合っていた。こうした変化と平行して、十九世紀に歴史研究が制度化されて専門的職業となってゆくにつれて、歴史家にとって一つのパラダイムが出現してきた。そして、このパラダイムが、ごく最近まで大学において執筆される歴史叙述に影響を及ぼし続けてきたのである。」(イッガース、13)

・「出来事の相互連関を把握できるような歴史学の手法を発展させようとした」(16)、「歴史学的＝文献学的方法と呼ばれることになるこの方法を使用した一つのモデル」(20)、「人間を取り扱う諸々の専門研究分野にとって解釈学的で歴史学的なアプローチの仕方が価値をもっていることを強調した」(21)。

・「「科学的」学派は、史料の批判的検討を強調したにもかかわらず、歴史研究のイデオロギー的機能を弱めることに貢献しなかったばかりか、むしろ歴史研究が内政や外交上の目的のためにますます多く利用されるのを促進さえしたということなのである」(26)、「歴史主義の解釈学的な方式は、社会主義批判にうってつけであった」(27)、「国家的な公文書から読みとれるような国民国家の歴史」(40)。

↓

民衆史、心性史(アナル学派)

土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史論』教文館、1987年。

4. トレルチ

「歴史的方法、歴史的思考法、歴史的感覚」「真の近代的歴史」

「第一は歴史批判にたいする原理的習熟であり、第二に類推の意味であり、第三はあらゆる歴史的現象間に生ずる連関がそれである。」(10)

「蓋然性の判断」(10)

「批判を始めて可能にする方法は、類推を適用すること」、「類推の全能とは、あらゆる歴史的出来事の原則的同質性を含むものである」、「聖書批評自体もまた諸伝承の類推によって成り立っている。」(11)

「歴史的生のあらゆる現象の相互作用」、「すべての出来事が恒常的な相互連関のなかにあり、全体も個体も互いに関連し一つの事象が他のものと関係しつつ、必然的に潮流を形づくることになるのである」、「われわれ自身の追体験能力」(12)

5. パネンベルク

・「トレルチによれば歴史的批判は、「すべての歴史的出来事の原理的同質性」を含む「類比の適用」に基づき、また、歴史的には普遍的な相関関係、「精神的・歴史的生のあらゆる現象の相互作用」があるという前提に基づいている。」(54)、「原理的同質性」、「あらゆる出来事は同質性を持つはずであるという要請」、「類比の持っている認識の力は、まさしく類比が非同質的なもののなかに同質的なものを見ることを教えるという点に基づく」(59)。

↓

方法論的現在中心主義＝歴史的思惟の解釈学的構造
制度的再帰性における歴史学・歴史研究

<参考文献1>

1. トレルチ『歴史主義とその諸問題 上中下』(トレルチ著作集4～6)、ヨルダン社。
『歴史主義とその克服』理想社。
2. C・アントーニ『歴史主義』創文社。
3. F. マイネッケ『歴史主義の成立 上下』筑摩書房。
4. K. ホイシー『歴史主義の危機』イザラ書房。
5. K・ポパー『歴史主義の貧困』中央公論社。
6. カール・マンハイム『歴史主義・保守主義』恒星社厚生閣。
7. 田中美知太郎編『歴史理論と歴史哲学』人文書院。
8. コリンウッド『歴史哲学の本質と目的』未来社。
9. リクール『歴史と物語 I II III』新曜社。
10. E.H.カー『歴史とは何か』岩波新書。
11. ゲオルク G. イッガース『ヨーロッパ歴史学の新潮流』晃洋書房。
12. H.R.ニーバー『啓示の意味』教文館。
H. Richard Niebuhr, *The Meaning of Revelation*, Macmillan, 1941.
13. 大木英夫『新しい共同体の倫理学 基礎論 上下』教文館。
14. 大林浩『アガペーと歴史的な精神』日本基督教団出版局。
15. その他
カール・レーヴィット『歴史の意味』未来社。
ニスベット『歴史とメタファー 社会変化の諸相』紀伊國屋書店。
アルフレート・シュミット『歴史と構造 マルクス主義歴史認識論の諸問題』
法政大学出版局。
ポール・ヴェーヌ『差異の目録 新しい歴史のために』法政大学出版局。
ドミニク・ラカブラ『歴史と批評』平凡社。
アーサー・C・ダント『物語としての歴史 歴史の分析哲学』国文社。

<参考文献2>

1. 『聖書講座』(第一、二、三、四巻。特に今回の講義に関連しては、第一、四巻)
日本基督教団出版局、1965年。
2. P.シュトゥールマッハー『新約聖書解釈学』日本基督教団出版局。
3. 出村彰・宮谷宣史編『聖書解釈の歴史 新約聖書から宗教改革まで』日本基督教団出版局、1986年。
4. ゲオルグ G. イッガース『ヨーロッパ歴史学の新潮流』晃洋書房。
5. トレルチ「神学における歴史的方法と教義的方法について」、『トレルチ著作集2』ヨルダン社。
6. パネンベルク「救済の出来事と歴史」、『組織神学の根本問題』日本基督教団出版局。